Journal of Asian and African Studies, No.84, 2012

【論　文】

南タイの学校における憑依の社会空間
情動のエスノグラフィにむけて

西　井　涼　子

The Social Space of Possession at a School in Southern Thailand
Toward the Ethnography of *Affectus*

Nishii, Ryoko

On 16 November 2004, at morning assembly in a junior high school in Southern Thailand, four pupils fainted. This event was the start of a series of similar group incidents at the school which were attributed to spirit possession. Subsequently, convulsions, ringing in the ears, sensing the presence of something nearby, sobbing as if possessed by a spirit, tightening of the chest that prevented breathing, and other symptoms were reported. This evidence of possession was only reported at school. When the children returned home they were cured. Coming into December, the events began to receive attention in the mass media and, all over Thailand, the school became known as the 'School Possessed by Spirits.' Incidents continued until the following February.

This paper is an attempt to go beyond previous anthropological discussions of group possession phenomena, which have largely been based on assumptions that involve opposing ordinary and extraordinary life situations. In particular, the modernist stream of thought in anthropology has regarded possession as an example of people behaving in non-rational ways. Such accounts, fundamentally assuming a mind-body duality seem to usually end up discussing aspects of autonomy. As such they report the observed behavior of bodies and dualistically interpret whether or not the will of the subject is control of the body. Polar concepts, such as subject/object, mind/body, or even thing/body, human/non-human, human/natural, have become commonsense matters of fact and have to be reconsidered. One way of transcending notions of agent/self and intentional/unintentional is to characterize the diversity of the manifold differences that generate events as a 'social space.'

This social space is a developing site of practice and, as such, involves dif-

Keywords: Possession, Social Space, Southern Thailand, *Affectus*, Duleuze
キーワード： 憑依，社会空間，南タイ，情動，ドゥルーズ

＊本論はアジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「『もの』の人類学的研究会―もの，身体，環境のダイナミクス―」における発表「南タイにおける集団憑依する学校―もの・身体・こころのダイナミクス」（2009 年 10 月 31 日）をもとに加筆修正したものである。参加者の方々から貴重なコメントをいただいた。また，2 名の査読者の方からは的確かつ建設的なコメントをいただいた。記して感謝したい。

fering forms of relationships, changing intentions, and varied actions, that is, multidimensional and changing processes that have to be taken into account. This is different from comprehensive objectivist constructions and models which place the observer in a privileged position outside the workings of the everyday world. Rather, any attempt to apprehend the social space entails close examination of the inherent processes of everyday practice that play out in myriad interactions.

Social space of spirit possession is generated by agents (actors) who are sensitive to *affectus* which means transformative potential defined by Deleuze flowing through *becoming* events on the site and at the time connected with these, local gods, water spirits and various other things, including the presence of ponds and shrines. This paper gives an account of the processes that gave rise to possession events. This account of spirit possession occurring on the spot analyzed as a social space opens up a new perspective on life toward the ethnography of *affectus*.

Ⅰ はじめに
Ⅱ 南タイの「憑霊する学校」
1 「憑霊」事件の概要
2 集団憑依の経過―教員たちへのインタビューから
3 憑依の様態―生徒へのインタビューから
4 さまざまな治療の試み
5 憑依のさまざまな原因
6 タイにおける他の集団憑依の事例
Ⅲ 憑依の社会空間―ドゥルーズの「生成変化」による考察
1 生徒が精霊に〈なる〉ということ―「進行中の生成変化」
2 出来事としての憑依現象―情動の伝染
Ⅳ 終わりに―民族誌家の責任，情動のエスノグラフィにむけて

Ⅰ はじめに

「仰天，憑霊する学校―身もだえする生徒を互いに制止」

タイの全国紙「タイ・ラット」にこのような見出しの記事が掲載されたのは2004年12月18日のことである。1987年のはじめてのフィールドワーク以来，10数年にわたって通っている南タイの調査村のすぐ近くの学校で起きた事件であった。その記事の内容は次のようなものである。

集団幻覚（upathan mu[1)]）の様相に似ている！

しかし，村人は原因は「祠」（san phiang ta）を取り壊したことにあり，それゆえ問題が起こったのだという。呪われた学校をみつける。中・高等学校の生徒が奇妙な症状を示す。健全だった生徒が，金切り声をあげて泣き喚き，身もだえしてもがき苦しむ。友人たちが助けあって止める。ようやく平静にもどっても，ふたたび何の原因もなく繰り返し同時に何人にもおこる。ついには残りの生徒たちが勉強することができない状態になる。これは何年にもわたっておこってきたことである。学校側は病院へもつれていったが，検査しても何も異常な

1） 本論におけるタイ語のローマ字表記はPhya Anuman Rajadhon（1961）をもとに作成した（西井2001: 8–9）による。声調記号は省略し，長短母音の区別はしない。

ところはみつからない。そこで，今度は呪術的（saiyasat）方法を使うことにした。呪医（mor phi）を連れてきて，例えば3年ごとにヤギを2頭を殺してささげ，儀礼を行った。そして臨時の祠をたてた。しかし，効果がなかったので，つい最近先生がその祠を取り払ってしまった。これまで行ってきたことを信じないだけでなく，侮辱していると，保護者は不満に思っている。学校の建設工事のときに死者がでたとか，この他学校の夜間の当直の先生が，長い髪の女性が歩き回っている夢を見たといっては恐れている。生徒の父母たちの多くは，精霊（phi）が出る学校だと信じている。

本論は，南タイの学校でおこった集団憑依という現象を，これまでの人類学における憑依をめぐる議論の前提であった，非日常的な現象として日常的な生の場と対極的に位置づけることを問い直すことから出発する。ここでは，憑依という現象を，むしろ「今，ここで」生成している出来事として捉える。そうしたアプローチにより，憑依が生の動態を顕現する現象であることを示し，生への新たな視角を拓くエスノグラフィの可能性を探ることを目的とする。

憑依は，英語では possession と表わされ，「所有」と同根で，身体を超自然的な存在に「所有された」状態をさす。健常な状態において自己をあますところなく支配・占有している意識的で理性的な人間主体のモデルの対極にある状態であると捉えられる。憑依は，とりわけ身体として生きる存在である人間のあり方について考えるヒントとなる。

これまでの憑依をめぐる議論の流れをボディは，行動心理学的な合理化論から，ローカルコンテクストや文化的ロジック，人間の想像力や創造性へと焦点を移動させてきたと述べる。個人の身体に注目して，行動的，心理学的な合理的人間のモデルからはずれる特異なパーソナリティの人物に焦点化したクラパンザーノ，オベーセーカラなどの精神分析的な記述が前者の代表といえる。そこから，文化的知識であり知識や治療の方法であるとみなして「コミュニケーションとしての憑依」，「経験の分節化のイディオムとしての憑依」，身体や自己（self）を知識や経験の他の領域に広げるという見方へシフトしたと見る（Boddy 1994: 414）。

ここでは，人類学における憑依をめぐる先行研究を，ボディのいう行動心理学的な研究と，身体や自己にかかわる文化的な知識や経験の研究の両者をまとめて「憑依する身体／個人に着目する議論」としておきたい。さらに，もう一つの憑依をめぐる研究の潮流として「憑依現象が社会にもつ効果に着目する議論」をあげることができるであろう。

前者の研究では，もっぱら身体／こころ，主観／客観といった二元論にかかわる主体性のあり方をめぐってなされてきたといえる。そこでの焦点は，現に行為する身体と，その主体の一致，不一致，二重性をいかに解釈するか，またその身体経験がいかなるものであるかということであった（ルイス 1971，Lambeck 1978，小松 1982，佐々木 1983，真島 1997，宮坂 1997，床呂 2002，エリアーデ 2004 など）。

後者の憑依現象が社会にもつ効果に着目する議論では，古典的な憑依の類型論にルイスの「周縁的憑依」と「中心的憑依」という区別がある（ルイス 1985）。憑依の社会的効果については，日本民俗学においても「憑きもの筋」の議論があり，「憑きもの」信仰は，病気その他の災厄・不幸の説明に役立ち，ムラの規範や秩序を維持させてきたのだという社会的機能面を強調する（石塚 1959，吉田 1972）。

1980 年代になると，憑依はモダニティとの関連で議論されるようになる。アッカーマンとリーは，女性労働者の集団憑依について，経営者と工場労働者との憑依をめぐる認識の違いを描き，憑依を抵抗と読み込んだ

(Ackerman & Lee 1981, Ong 1987)。モダニティへの適応や，抵抗としての憑依とする見方はボディの研究をはじめその後主流となっていくが，こうした研究者の解釈中心の見方への反論もなされている（Boddy 1989，石井 2007，浜本 2007 など参照)。

本論は，これらの研究と現場における身体に注目する点では前者の研究関心を共有しているが，憑依現象を憑依する身体としての人のみではなく，そのまわりのモノの配置や共有された観念などの絡まりによって生み出される出来事として記述分析することに焦点をあてる。その時に，憑依現象を特異な個人におこる現象であるとは考えない。また，社会現象に憑依という視角から切り込む視点は共有しつつも，既存の秩序や社会関係をあぶりだす指標として憑依を捉えるよりも，ある組み合わせ，ある状況においてその場において現出してくるプロセスとみる。それはある意味で，あらかじめ憑依が起こるコンテクストとしての社会を措定することなく，その場で起こっている出来事にそって記述することで見えてくるものを浮かび上がらせようとする手法である。このような手法をここでは「社会空間」論的方法と呼んでおきたい。

「社会空間」とは，実践の場に展開している，異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程を捉えることをめざす。それは，日常の営みの外にある客観主義的な構造やモデルといった全体を仮定することなく，インタラクションのなかで日常実践がつくられている内在的プロセスを捕らえようとする試みである。日常的実践の場とは，身体として生きざるをえない人間がある場所，人，モノとの係わり合いの中で活動する場である（西井 2006: 2)。「社会空間」論的アプローチでは，主観／客観，こころ／身体といった対立軸に還元して憑依現象を捉えるのではなく，さらにはモノと身体，人間と非人間，人間と自然といった対立軸の自明性をも問い直して考察をすすめる。つまり，主体と客体，意図や非意図を超えて，さまざまな差異の重層性から出来事が生成されるアクチュアリティ[2] を捉えることをめざす。

それはまた，自然存在としての，つまり身体としての人間の実践過程を，意志や意図を明確にもった理性的人間としての主体を中心にすえた思考からの脱却を図る。主体を超えて，出来事のアクチュアリティに接近することをもくろむ。それでは，主体を超えたアプローチにより，何が可能となるのであろうか。それは，日常・非日常という既存の枠組みの自明性を突き崩し，人やモノが絡まって生成していく一つの過程として，またどこでも，いつでも起こりうる出来事の一つとして憑依現象を捉えることで，ドゥルーズの言葉でいう潜在性（ヴァーチュアル）と背中あわせにあるアクチュアリティを捉えることができると考える。潜在性が具現化して出来事として生み出されていくプロセスを捉えることが本論の目的である。

本論は，それを出来事として捉える人類学者である私自身の視点もそこに内包しつつ，現出しつつあるあの場あの時の出来事を，書きとめ，留めようとするある意味で矛盾をはらんだ試みかもしれない[3]。しかし，「エク

2）ここでのアクチュアリティとは，ドゥルーズがヴァーチャル／アクチュアルとポッシブル／リアルを区別して用いるところのアクチュアルを念頭においている。ポッシブルは今ある現実から回顧的に捏造されたもので，こうであったらいいという可能性として現実（リアル）に対比されるが，ヴァーチャルは潜在的なものとしてアクチュアルな「今ここ」の裏側にあり，潜在的なもののアクチュアライゼーションは，差異によって遂行される。アクチュアルな諸項は，それらが具現することになる諸特異性とは類似しておらず，異化＝分化は創造なのであると，ドゥルーズは述べる（ドゥルーズ 2007: 120)。

3）例えば，高木はこのような試みを，郡司のいう「内部観測」に依拠して「無根拠な選択の反復としてコミュニケーションの問題をとらえようとする態度という。高木は，徹底してコミュニケーションにおける言葉の「不定さ」の構造に注目する（高木 2002: 52–55)。

リチュールの目的とは，人生を非個人的な力強さの状態へ引き上げることである（ドゥルーズ／パルネ 1980: 78)」というドゥルーズの言葉にのって，書くことを試みてみたい。Ⅱ章では，集団憑依の場からの記述を行い，Ⅲ章でいくつかのテーマにそって憑依現象の分析を試みる。最後にⅣ章では，こうしたエスノグラフィを書くことの民族誌家の目的と責任について考える。

Ⅱ　南タイの「憑霊する学校」

1 「憑霊」事件の概要

その学校（以下Ｔ学校と呼ぶ）は南タイ西海岸，サトゥーン県の北部のゴム園の広がる林野のなかに位置し，中学１年生から高校３年生までの生徒が学んでいる。学校が創立されたのは比較的新しく1993年１月13日である。集団憑依がおこったのは，初代校長のＭ氏が2004年までの11年間つとめた後，第２代目の女性校長に代わって２カ月ほど経ったころであった。

2004年11月16日に，４人の生徒が朝礼中に失神した。それは，その後の一連の集団憑依事件の端緒となった。その後，同様の症状を示す生徒が増え続け，生徒たちは登校すると憑依し，帰宅すると治るという状態が続いた。

この間，教員のみならず，保護者も学校に見張りにたち，事態の沈静化に努めたが，12月になると，「事件」はついにマスコミにとりあげられるようになった。本論の冒頭にあげた記事を掲載したタイ・ラット紙などの新聞報道やテレビ局の取材などで，この学校は全国に「憑霊する学校」として知れ渡るようになった[4]。その間，自薦他薦の呪医や仏教僧，華人系の呪医，イスラーム知識人などさまざまな治療師が呼ばれた。医者，警察なども学校にきて対策にあたった。また憑依した生徒の親も，子供を病院や呪医のもとに連れていき，個別に治療が試みられた。

[表 1] Ｔ中学高等学校概要

初代校長	1993年～2004年９月16日：Ｍ氏
第２代校長	2004年９月17日～2005年２月３日：Ａ氏
第３代校長	2005年１月４日～：Ｐ氏
教師	男性５　女性７　合計12
生徒	男子143　女子161　合計304 (2004年当時)

12月26日　スマトラ島沖地震が発生し，津波被害を避けて近隣住民が学校で一時避難生活をするようになると，憑依騒動もしばらくはおさまったかにみえた。ところが，住民が帰宅し再び日常的な学校生活が開始されると，生徒の憑依も再び起こるようになった。年が明けて１月に，生徒の保護者が校長の異動を求める100名以上の署名を県の教育委員会に提出した。２月３日に校長はＴ学校を去り，Ｍ村小学校へ異動して，騒動はおさまった。

Ｔ郡の保健所の報告書によると，憑依現象は次のような経過をたどった。「痙攣を起こし，耳鳴りがし，近くに何かがいるように感じ，精霊が憑依したかのように泣き叫び，胸が締め付けられて息ができず，失神するといった症状を示す。10分から30分の間，１日1-2回。2004年12月20日から2005年２月11まで，39名，うち女子が38名，男子は１名のみであり，合計138回起こった。」2004年当時の生徒数は，男子143名，女子161名，合計304名であったので，男子生徒の0.6%，女子生徒の23.6%が憑依したことになる。この地域は住民の大多数がムスリムであり，この学校においてもムスリムの生徒が80%以上を占めている[5]。憑依した生徒はほとんどがムスリムで，仏教徒は２人のみで

4)　校長がマスコミに連絡したとある生徒はいっていた。
5)　2004年の仏教徒とムスリムの割合の資料は入手できなかったが，2005年には，男子149，女性175で324名のうち仏教徒60，ムスリム264で，ムスリムが81.5%であった。

［表 2］憑依した生徒の年齢別人数

13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳
8 人	10 人	11 人	9 人	1 人

［表 3］憑依の回数別人数

憑依の回数	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	7 回	10 回
人数	2 人	9 人	5 人	5 人	9 人	3 人	2 人	4 人

ある。

憑依した生徒の年齢は 13 歳から 17 歳までで，中学 1 年生から高校 1 年生までの生徒が多くを占めていた。憑依の場所は，学校の教室が 22 ケース，旗の掲揚台の前が 10 ケースである。みな学校にくると憑依し，帰宅すると直るというように集団となると憑依した。時間にしては 10 分から 30 分であるが，次々と教室で憑依が起こった。教室を飛び出して池に飛び込もうとする生徒や，金切り声をあげて走り回る生徒を，先生や生徒たちが制止するために授業ができない状況が約 3 カ月間続いた。

憑依した生徒たちを出身村別にみると，多い村と全くいなかった村とがある。T 村では，20 人の女子生徒のうち 16 人が憑依した。一方私の調査村である M 村では 1 人の生徒も憑依しなかった。T 学校には 10 キロメートル以上も離れた地域から通学する生徒もおり，多くは村から通学バスで通っている。そのため，憑依した生徒の多かった T 村は学校の行き帰りのバスの中で憑依する姿に接する機会も多かったと考えられる。M 村の場合は，村の入り口の土地神ト・ナーンが強いので精霊が入ってくることができないのだというのが，M 村の村人や生徒のもっぱらの説明であった。

2　集団憑依の経過―教員たちへのインタビューから

憑依騒動が終結して約半年後の 2005 年 6 月 28 日に行った T 学校でのインタビューから，出来事の経過を辿ってみる。インタビューに応じてくれたのは，事件当時の校長が学校を去ったあとも残っていた教員たちである。学校の職員室の一角で主に女性教員 2 人と男性教員一人が応じてくれた。私が M 村からきたと自己紹介をし，集団憑依についてききたいと切り出すと，教員たちは口をそろえて，この学校から M 村の小学校に転任した校長が，一番事件のことをよく知っていると皮肉っぽく言った。じつは，T 学校を訪問する前に，M 村で小学校に新しく赴任してきた校長がその学校からきたときいたので，集団憑依についてききたいと当該の校長にすでに尋ねていた。「事件については話したくない，知りたいならばその学校にいってきけばいい」と，その校長にはけんもほろろに断られたのであった。それゆえ私は T 学校を訪れることにした。そこでようやく，なぜその校長がそんな態度をとったのかがわかったのである。以下は教員たちの話を，フィールドノートの記録から再構成したものである。

集団憑依がおきたのは，2004 年 11 月から 2005 年 2 月にかけての約 3 ヶ月間である。はじめて「事件」がおこったのは，このあたりでは珍しい女性校長が 9 月に着任した後，約 1 カ月間の学校の休みをはさみ，11 月 1 日に学校が再開してまもなくの 11 月 16 日のことであった。T 学校は事件発生の 11 年前に，T 町と M 村の中間地点につくられたので，これまで T 町の学校に通っていた M 村の子供たちの多くはこの学校に通うようになった。女性校長の前任者は，T 町出身の仏教徒であるベテランの男性教師で，設立当初から 11 年間にわたって校長を務めた。二代目となる新校長はサトゥーン県の別の中学校で教員をした後，試験を受けて T 町で教育指導主事（swksanithet）となり，そして T 学校の校長として赴任してきた。

学校は，住民のほとんどがムスリムである地域に位置している。T 学校では，2 年に一度，共食儀礼（tham nuri）を行い，土地を使用する許可を土地神に請うためにヤギのカレー

写真 1　T 学校入り口（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

写真 2　T 学校の校舎（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

写真 3　T 学校の職員室。ここで憑依して倒れた生徒たちを介抱していた。（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

写真 4　T 学校内の池。ここに憑依した生徒たちが飛び込もうとした。（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

写真 5　T 学校の裏山，根本に祠のある木
（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

写真 6　T 学校の裏山にひろがるゴム園
（撮影日　2005 年 8 月 5 日）

を供えてきた。新校長は仏教徒なので，動物を殺すことは罪だとし，その儀礼を中止するように命じた。ちょうど儀礼を行う 2 年目にあたっていた。集団憑依は, 4 人の女子生徒が失神することからはじまった。目の前が暗くなり，心臓が震え，息ができなくなり，胸が重くなるという。高校 2 年生の仏教徒の生徒が一人，ムスリムの生徒が 3 人で，そのうちの一人は生理痛のためお腹が痛かったという。それゆえ教員たちはたんなる生徒個人の体調不良だと思っていた。そして 5 人目がたびたび失神するようになった。さらに失神するだけではなく，徐々に大騒ぎするようになってきた。事態の伝染を恐れて，校長はこの 5 人

に対し，学校にこないで家で療養するようにいった。ところが，5人が学校に来なくなると，次には，10人が一挙に憑依した。今度は中学1年と2年の生徒で，そのうち仏教徒は一人だけである。こちらはよりひどい症状で，はじめは目が徐々にかすみ，手が宙をさまよい，失神し，ついで泣き叫びはじめた。大騒ぎをし，走って学校の裏山に登ろうとしたり，池に飛び込もうとしたりした。先生の横にジョンカベン（袴のようなズボン）をつけタイの服装をした人が見えるといったりした。その人はトラックにのってきたという。そのうち12月になると，はじめて男子生徒が憑依状態になった。この生徒は高校1年生の体の大きな運動選手で，いつも暴れる生徒を抱きかかえたりして介抱をしていた。彼は成績もよく優秀な生徒だった。力が強いので，クラス中でかかっても彼を止められなかった。泣き喚き，池で水浴びすると言った。正気に戻るときにはもう一度失神した。精霊が憑依した生徒達は決して成績の悪い生徒ではなく，中にはとても優秀な生徒もいた。校長は，こうした中，恋人がいるとそばに付き添ったりしていたので，わざと恋人の気をひきたくてやっているのだといった。しかし，生徒は階段で失神したり，足の指を折ったのに痛くないと副木を引き剥がして走ったり，顔をぶつけてはらしたりしており，わざとやってるとは思えなかった。

12月になると医者，保護者たち，警察なども学校にきて対策にあたるようになった。テレビ局も朝早くから連日取材にきた。また新聞の一面にも掲載された。中学3年生の生徒は乱暴な言葉をつかい，大暴れした。男子生徒二人は学校の裏に走っていって，土地神を祭った祠（san phraphum）をけり倒してしまった。窓から飛び出そうとするのもいた。その頃には校長も万策つきて村人に呪術（saiyasat）でも何でもやらせるようになっていた。われこそはと呪医がいろんなところからやってきた。全部で30人ほどにもなる。ハジャイ[6]からもきた。人によっては，学校に到着する前に憑依して途中で帰ってしまう者もいた。大勢の生徒が憑依するクラスと，あまり起こらないクラスがあった。高校2年生と3年生では誰一人憑依しなかった。

県の調査委員会は，原因は校長と他の教員の間の確執からくると結論づけた。そのために生徒が緊張したとする。しかし，それは原因ではありえない。校長と教員が対立したのは，校長が憑依した生徒を助けることを先生に禁じたことからきていた。校長は，助けた教員を非難した。生徒はわざとやっていると思っていたので，ほっておけと言った。しかし，教員の方は池に飛びこもうとする生徒をほっておくことはできない。校長は教員たちに，見張るな，助けた教員は（精霊を操る）呪術師（mor phi）とみなすと言った。中学3年の女子生徒は校長に「おまえ mwng，おれ ku」という無礼な口を利き方をし，校長をなぐった。

2004年12月26日にスマトラ沖地震が起こり，村人が津波から逃れて学校に避難してきた。憑依騒動もその1週間の間はおさまっていた。ところが津波直後の混乱が治まると再開した。

精霊は大人にも憑依した。その女性は学校の近くに住んでいたが，彼女の子供はT学校で勉強しているわけではなく，学校とは直接関係はなかった。ゴムのタッピングのため学校のすぐ裏手にあるゴム園に午前1時にやってきたが，そのまま学校に入り暴れ始めた。彼女は両手を水平に伸ばして棒に縛られ，抱えられてやってきた。そこでちょうど当直だった男性の教員が相手をした。朝6時になってようやく，「おれは行くよ」といって精霊はその人（の身体）から出て行ったという[7]。

6）T学校からは約100キロ，車で2時間ほどの距離にある南タイ最大の都市。
7）タイ語では精霊が憑依することを（身体に）精霊が入る（phi khao），憑依状態から脱することを（身体から）精霊が出て行く（phi ork）と表現する。

騒動が大きくなってから牛カレーやヤギ・カレーを供えたが，効果がなかった。そのときは収まっても土日をはさんで月曜日になると再びおこった。結局39人が憑依状態となった。2月になってようやく騒動は収まった。校長は，学校を去ることで事態が収まればよし，しかしまだ続くようだったら帰ってくると言っていたという。（その校長がM村に赴任してきたのである。）

憑依した生徒たちは，仲がいい者もいれば悪い者もいた。男子生徒に憑依したのは精霊のリーダーだった。精霊は，ムスリムの精霊，タイ仏教徒の精霊，中国人の精霊と色々おり二手に分かれて争った。はじめは土地神が憑依したとしても，後にはいろんなところから精霊が学校に集まってきたのだと言う。

憑依すると生徒は恥ずかしいということに無関心になる。スカートが破れても平気で走り回る。それゆえ女子生徒にはスカートの下に短パンをはいてくるようにと言っていた。しかし，はいていなかった女性徒が憑依して下着がまる見えになった。普段は勉強のできる陽気な子供が多く，保健所の報告書みられる，もともと勉強のできない子供の病的な症状であるという判断は間違っている。K村のマッサヤーなんてとても優秀で朗らかな子だ。今は元に戻っている。

しかし，こうした事態になって，生徒たちが互いに相手を思いやり，助け合っているということがわかった。前にも何人か失神するケースがあったけれど，そのときはヤギ・カレーを要求どおりすみやかにやったので，問題は拡大しなかった。

3　憑依の様態―生徒へのインタビューから

T学校に通うM村在住の中学1年生の女子生徒へのインタビューからは，憑依騒動当時の学校の様子が浮かび上がる（2005年6月28日[8]）。

「タイ人，ムスリム，中国人とさまざまな精霊が入る。奇声をあげて走り回り池に飛び込もうとする。当人は憑依したときのことは覚えていない。足の指を折ったり，女子生徒はスカートが破れたままで走り回る。スカートの下に短パンをはいてくる生徒が増えるが，ときにはいてない子が下着まるみえて走りまわる。友人や恋人がついて介抱する。

1日10人。池に飛び込んだりする。ある人は丁寧に話す。ある人は罵る。ある人は叩く。人によっては失神するだけ。人によっては微笑むだけで，何も話さない。床に寝ている。ある人は食べる。みかんが食べたいという。チャンプー（果物の一種）を食べたいといったりする。食べさせると治る。人によっては治らないのもいる。花をあげたり，丁重に話したりしなくてはならない。人によっては，丁寧に話していると，さらにひどくなる。ある人は，倒れないで走っていく。捕まえようとするが間に合わない。（朝礼で）整列して部屋に入って座るやいなや倒れる。金切り声をあげる。

こうした憑依について校長は，（憑依する生徒は）恋人に介抱されたいのでわざとやっているという。しかし，憑依したふりをしている人はいない。どうやってふりをするのか。スカートなんかも破けてしまってる。学校では，スカートはいても中に短パンをはくようにと先生がいった。失神して意識がなくなったときのために。あの日チラー（友人の名）が短パンを中にはいてなくて，憑依して走り，スカートが破れてみえた。」

実際には，恋人が見張って介抱する場合もしばしばあったという。「椅子がおいてあって，こんなふうに座り，恋人も座っていた。世話をする，もし憑依したら抱いて保健室に連れていくように。ところが，その恋人は（彼

8）これらの生徒のインタビューは，録音することに同意してくれたため，会話をトランスクリプションしたものから記述している。

女が憑依したときに）ちょうど他の人を先に助けにいったので，彼女は倒れて頭をうった。下に下りていって走った。みんなで捕まえようと走り，みんな服が汚れた。」

こうなると勉強どころではなくなる。「ある生徒は勉強しないで，教室の戸口で待ち構えて，（憑依した生徒が）走ってきたら捕まえる。ある先生は，捕まえなくて，ただ後ろをついて歩いて，倒れたら介抱する。人によっては池に飛び込もうとするので捕まえなくてはならない。あの日，高校2年生の男子生徒が池にはいった。先生がひっぱって連れ戻した」。1日に1教科だけしか勉強できなかったりした。ときには，教室で憑依した精霊がそれほど強力でなかったら，先生が精霊に「（生徒の身体に）入らないでくれ，教えさせてくれ」と頼んだ。（精霊が）了解して治るということもあった。精霊は朝9時に出て行って，1時にまた帰ってくるということもあった。「（精霊が）疲れたから行くけど，また1時にくるといって，1時になったらちょうどきた。来なくていいというのが間に合わなかった」と言う。ある男子生徒は祠を壊した。男性教員の1人は，供え物をすれば生徒にもう憑依しないと約束したのに生徒が憑依したので，怒ってその祠に火をつけて焼いてしまったという。

憑依の状態

実際に，憑依している生徒の様子はどのようにみえていたのであろうか。友人が憑依した女子生徒（中学1年生）は次のように語った。

「人によっては（憑依）しそうになったら話せなくなる。ムー（友人の名前），と呼びかけても話せない。とても怖がる。入ってこないでという。ムーは首のところに，噛み跡が出る。彼女は，精霊が彼女を噛むという。憑依したときには赤くなる。とても赤い。左に二つ，そして右。（魔よけの）首飾り[9]を作って首にかける人をこわがる。はじめは怖くないというが，連れて行こうとすると怖がる。

精霊はムスリムのときも仏教徒のときもある。ムーに入ったのはムスリム二人の兄弟だという。クウェティオ（麺の一種）を食べたいという。連れていっても食べない。そして走って車にぶつかりかけた。死なせようとしたという。猫が好きではない精霊が，猫を叩こうとした。ユ（友人の名）に入った精霊は，ドラエモンがほしいという。家にかえって礼拝の前の体の洗浄を先にするといったが，やはり憑依しているときには，礼拝をしなくてもいい。ドラエモンを彼に買わなくてはならないという。買ってあげたかどうか知らないけど。」

「はじめは保健室に連れていったけど，いっぱいになって，屋外の舞台の前に寝かせた。呼吸困難になった生徒を，校長の部屋につれていった。そこはエアコンがきいていたから。そこで，校長に狼藉を働いた。その生徒が正気にもどったら，校長は罵った。それで父母のなかには不満をもつようになった者もいる。ムーは「（校長を）追い出してやる」と言った。ついには校長の頬をたたく生徒も出た。

「人によっては走っていって，指を骨折した人もいる。そして正気にもどったときには痛い。憑依しているときには痛さも感じない。（トイ姉さんが）鉄の支柱をけって，ほとんど（関節が）外れそうになった。トイ姉さんは笑って，なんともないといった。そして（精霊が）出て行ったら，とても痛くなった。」

憑依の感覚

憑依状態になった友人の様子について「人によっては，目を閉じない。目がうつろになって，何も見えていない。人によっては怖がって泣く，助けてと，手をつかむ」と，傍でみていた生徒は言う。

9）僧や呪術師など霊的な力があると思われている人が，呪文をこめて糸を撚って作った首飾りや腕輪などを身につけると，精霊が身体に入るのを防ぐことができると考えられている。

マサヤーは，教員のインタビューでも言及されたように，明るく聡明な高校1年生である。彼女自身は憑依したときのことを次のように語った。「憑依中のことは覚えていない。入る前の状態は，何かが横にいて，怖いと感じる。もうすぐ入りそうだと，こわい感じがする。そして何も感じなくなる。もう感じない。」

「心を強くしようと思っても，なってしまうともうだめだ。」その後，マサヤーは憑依しなくなって，友人が憑依しているのをみて，あんたもあんなふうだったといわれ可笑しかった（talok）という。マサヤーは20人中16人が憑依したT村に住んでいる。

異質な精霊の社会空間の現出

はじめの2・3人の憑依から徐々に10人，20人と憑依する生徒が増えるにしたがって，憑依した精霊の間にさまざまな関係が現れてきた。「人によっては喧嘩する。またある人は大人の精霊で，ある人は子供の精霊だ。大人も喧嘩する。水を飲んで叫びあう。そうしたら勉強できない」と言う。

ついには，そうした精霊たちがグループ化をはじめた。仲のいい精霊，悪い精霊が現れ，やがて二手に分かれて争いはじめた。しかし，その関係は憑依したときのみの，精霊間の関係であり，憑依された人同士の関係性とは関係がない。普段仲が悪いのに，憑依した精霊同士は仲がよい，その逆に普段は仲がよいのに，精霊同士が仲が悪いということもあった。「精霊が友達同士というのもいる。憑依して，手を握り合っている。一緒に座る。あがってきて，遊ぶ。そして精霊によっては校長が好きではない。名前は何だったかな，マリーといった。」

憑依がはじまって1カ月程経った12月になると，精霊の中に序列ができはじめた。精霊のリーダーが出現したのである。体の大きい運動選手でもある男子生徒に憑依した精霊だ。女性生徒は次のようにその様子を語った。

「（憑依した）男子生徒を，あの日ほとんど学校中で走って捕まえた。間に合わない。高校2年か1年だ。走っていって，精霊が憑依している女性のところにいった。『戻れ，池の中に戻れ。ここにあがってくるな。遊ぶところじゃない。いうことをきかないと，蹴り上げるぞ。俺と戦うことができるのか』と男子生徒は言った。（他の精霊に憑依していた生徒は）走って逃げた。」

ここでは，学校の社会空間の中に，異なる秩序をもつ精霊の社会空間が出現していることがみてとれる。それは，通常の秩序とは差異化したものとして，異質な社会関係を生み出しつつ，学校全体の社会空間を重層化させ，変質させていく。

4　さまざまな治療の試み

このように，学校で憑依現象が広がるなか，周囲の人々はただ手をこまねいていたわけではない。地域の病院や保健所の医者のみでなく，南タイ最大の都市ハジャイから大学病院の精神科の医師団までが学校に入って調査を行い，様々な治療を試みた。また，呪医や宗教的方法による解決も試みられた。その経過は保健省の報告書からみることができる［表4］。11月18日に最初の憑依の事例が発生し，その約1カ月後から学校の外部からの解決が模索され始めて，翌年2月におさまるまでその試みは行われた。

今回（の集団憑依で）は，土地神への供え物も以前のような効果はみられなかった。T学校のある教師は次のように語る。「ヤギ・カレーの供え物は，毎年やらなくてはならない。今回，憑依が起こってからカレーの供え物を何度も行ったが治らなかった。ヤギ・カレーの費用は学校が出した。牛のカレーのときには生徒1世帯50バーツを徴収した。カレー料理にして，生徒に食べさせた（2005年6月28日インタビュー）。」

また，仏教やイスラームといった宗教的方法もさしたる効果は見られなかった。同じくT学校の教師は語る。「僧が儀礼を行って

［表 4］学校での集団憑依対策の経過（保健省報告より）

2004 年 12 月 17 日　10 人に症状がでた。T 郡病院と T 郡保健局の合同調査チームが入って 活動をし始めた。子供を色に分けて活動を行った。赤色は，少なくとも 1 度は症状が出た生徒，つまり健康に問題がある，精神的に弱い生徒が赤色のグループである。緑色は，普通の生徒である。
12 月 20 日　ソンクラー病院のチーム 5 人が合流した。サトゥーン病院と T 郡病院の精神科医は，教員たちや村の役員，関係のある保護者に対して，症状，解決法など集団幻覚について講義を行った。
12 月 22 日　ソンクラーナカリン大学の精神科のチームが，25 人を選別して，精神健康局の感染に関するアンケートを行った。
12 月 23 日　学校と保護者会，および地域の委員会は合同で，民衆の信仰と要望にしたがって，宗教儀礼を行った。
2005 年 1 月 11 日　ソンクラーナカリン大学の精神科のチームは，午前中に 10 人の生徒のデータを収集した。午後には 3 人の症状のある生徒の家を訪問した。
1 月 17 日　保護者の代表と，村の委員会が，解決の方法についての案を提出した。校長の異動を提案した。なぜならば，今回の事件の原因は，校長にあると信じているからである。
2 月 2 日　12 人に症状。この日は女性校長に替わり，新しい校長が着任した。
2 月 8 日　学校は，教師の一人に土地神への儀礼を行わせた。
2 月 10 日　午前に 1 人憑依し，土地神が原因と信じて供物を供える。この儀礼を行って以来，まだ生徒は症状を示していないという。

も治らなかった。イスラームの導師（phra islam 直訳では「イスラームの僧」）がやっても治らなかった。（いろんなやり方が）混ぜこぜになっていた。いろんな宗教でやったけれど直らなかった。イスラームでやったり，仏教でやったり，中国の宗教でやったり。アマー（華人系の女性呪医）もやった。呪文がある。助けることができると，聖水を作ってみんなに飲ませたけど，相変わらず元通りだ。」

5　憑依のさまざまな原因

学校の集団憑依については，異なる立場から様々な解釈がなされている。それは，土地神への供え物を怠ったこと，供え物をするべきであるという村人の考えを校長が無視したこと，より精神医学的な学校内における校長と教師の確執といった様々なレベルにその原因が見出される。具体的な行為や思惑，それぞれの齟齬が，集団憑依という出来事を生成していく様子が見られる。

村人，初代校長，保健省の調査報告，教師の視点から，いかなることが原因とみなされたのかを検証してみよう。

1）村人―これまで行ってきた土地神への供犠を女性校長が無視したこと

村人の土地神への信仰を無視した校長の不適切な対応により，集団憑依は起こり，校長が学校を去ることによっておさまった，というのが村人の見解である。

憑依騒動当時の女性校長について，ある保護者は次のように語った。「校長は鼈甲（khra）を信仰しているという。腕にはめている鼈甲。手首にはいはめると，（霊的な力が）身体に入る（sing yu nai tua）。憑依した人もその腕輪をとりあげようとした。後には彼女は学校にしてこなくなった。」鼈甲を信仰すると，呪術で性的な魅力をアピールし，若くみえるといわれている。また，別の保護者も「短いスカートをはき，商売の女性のような服装で，髪を赤く染めている。服装が校長として適当でない。他の先生が生徒を助けているときに，鍵をふりながら立ってみていた」と語った。校長は，校長に相応しい風格に反する服装やその横柄な態度から反発をかったものと思われる。

憑依した生徒に対する彼女の対応も反発をかった。校長は憑依を恋人の気をひきたくてわざとやっているなどと罵り，池に跳びこも

うとする生徒を助けようとする先生を，そうした騒動に加担していると非難した。村人はいう。「憑依した生徒の両親は彼女を好きではない。精霊が（身体から外に）出たら，校長は生徒を罵って『オーロー（売女といったニュアンスの女性への侮蔑的な言葉），わざとやってる』と言う。どうやってわざとやるんだ。指なんて骨折しているのに。憑依から戻ると（骨折したことに）気づく。でも憑依しているときは，罵られると，ますます罵りかえす。」

校長がついに異動となった経緯については，次のように語った。「校長は『もし自分が転任して治ったら，移ったままでいる。でも，精霊憑依がまだなくならなかったら帰ってる』と言った。そのとき，まだ転任するかどうか曖昧だった。そしたら精霊がまた入ってきて，『まだ移っていないのか』と言った。それで彼女は転任した。そうしたら治まった。」

2）初代校長―村人の意見や保護者の意見（考えの傾向）（krase chao ban, krase phu pokrorng）を無視したこと

集団憑依がおさまった約半年後に，初代校長であったM氏にインタビューすることができた（2005年8月9日インタビュー[10]）。M氏は1993年にT学校ができたときに，T町の小学校の副校長から校長として赴任してきた。2004年に今度はT町小学校の校長となりT学校を去った。もともとT学校の近くのT町出身の中国系タイ人である。清明祭[11]や中国正月は慣習として欠かさず行う。しかし精霊を信じるかというと信じないという。次の話は，自分が信じているのではなく，生徒が話したことであると断ってから話してくれた。

1992年からはモスクで授業をしており，学校が設立された後もまだモスクで授業をしていた。1995年になって現在のところに校舎をたてて移った。その年の終わりごろに，生徒が家で憑依して学校の土地神が警告（tak）していると言った。夢でみたりした子もいる。親が土地神が学校に憑りついているといいにきた。それで保護者たちが生徒が学校で幸せに，安全に過ごせるように学校や校長に土地神を祀ってくれと言った。はじめは信じなかった学校側も，多くの保護者の意見をうけて，土地神から土地使用の許可を請う儀礼（khor thi）[12]をしなければならなかった。その後は精霊は出なくなった。3年に一度ヤギ2頭をヤギ・カレーにして供える。はじめは，ろうそくを点して精霊と話をする霊能者を村長がつれてきた。（その霊能者を通して精霊は）3人をよこせと言った。3人の命をよこせと言った。それはできない，と押し問答し，代わりのものにしてもらえないかと頼み，3年に一度，四足動物を供えることで合意した。自分が校長をしていた1995年，1997年，1999年，2001年，2004年と5回やった。先生や生徒からお金を集めて，村人や先生が参加してやっていた。だいたい土曜日なので生徒は手伝いの子以外はきていない。ムスリムが多いので豚を供えるわけにいかないので，ヤギ・カレーにした。土地神はムスリムというわけではない。

土地神の素性がわかったのは，1998年に一人の生徒が憑依したことによる。とてもやせたユアーという名のK村の子だ。栄養失調のようでよく倒れていた。現在は大学生だ。彼女は一人で宙をみつめてにんまりと笑っていたりして，頭がボーとしているようだった。

10）この時は，録音してもいいかと尋ねたところ，M氏が「録音しない方がいい」という返答だったため，フィールドノートの記録をもとに記述している。

11）中国系タイ人が4月に墓参りを行う儀礼。1月-2月に行う中国正月は主に世帯単位であるが，清明祭は親族が集まる機会となる。

12）土地神にその場で何か行う許可を得るために行う儀礼で，使用許可を請う言葉を唱えて水を地面に流す。火葬などを野辺で行う場合にも，点火する前にはこうした儀礼を行う。

ユアーは1998年のどの月だったか忘れたけれど，3日間憑依した。記憶が正しければ金曜日，月曜日，水曜日だった。1日目は病院に送った。調べても何も異常はないという。2回目は家に送った。3回目は母親がきて座って見張っていた。その後，学校での憑依は2004年の今回の事件まではない。ユアーが言うには，土地神は3人いる。きれいな女性で髪の毛が長い人，女の子，そして髪の毛を髷にして，ジョンカベン（袴のようなスボン）をはいている男の子。この3人は友好的でわるさをしない。さらによそから来た精霊が二人でる。両方とも女で，一人は白い服をきて名前をカンティマー・ポンサクンという。もう一人が赤い服をきて名前はわからない。赤い方が入ると大暴れした。暴れて，叩いたり蹴ったりする。白い方は礼儀正しく話す。この二人は折り合いが悪く，どっちが（体に）入るかを争っている。同時に来るといつも赤い方が勝つ。白いのは，ハジャイで車にはねられて死んだが，その後，バラジー（T学校の位置する村の隣村）出身の友達を探しにきて見つからず，学校にきたという。赤い方は，（ソンクラー県）サバヨーイの人で，ムスリム女性がわけがわからずブラジャーやパンツなどの下着を祠にかけたので，怒って憑いた。その人がここに帰ってくるのについてきて，学校のところでその人から離れて学校にきたという。

ユアーと同じクラスの高校2年の女子生徒が，怖がって学校に来ない。どうしたらいいかと母親と姉が校長に相談にきた。校長が精霊のことを話してユアーからきいた精霊の名前をいうと，姉が飛び上がって驚いている。姉はその精霊と同じ名前の友人がハジャイ（南タイの大都市）で車にはねられて死んだという。自分は半分信じて，半分信じない。自分で自分に問いかけるに，精霊はまだいるということだ。こうして出てくるのだから。この話は全部は書く必要はないよ，自分が迷信深いといわれるから[13]。

M氏は，今回の騒動のときにT学校を一度だけ訪問したという。そのときは憑依した生徒は前校長をみると，起き上がって挨拶をして教室に入っていった。「精霊は自分をこわがる。人はこわがらない」と，M氏は笑った。

3）保健省の調査報告―村人の精霊信仰，及び校長と村人／教師との確執

保健省の調査報告書は，次のように5項目にわたって結論づけている。

1）地域の村人の性質は，田舎のものだ。「精霊」を信じる文化をもっている。民衆の昔からの信仰であり，病気の原因を探索するにあたって呪術の儀礼を行う。

2）土地神に儀礼を行い，憑依した精霊が，「かつて住んでいた木は今は狭苦しくなってしまった，（精霊が）大勢いるせいで食べ物も十分ではない」と言った。多くの生徒が一度に病気になることによって，呪術への信心がますます高まった。

3）保護者の一部は，毎年学校が行っていた宗教の儀礼を，新しい校長がその重要性を理解しなかったことによって今年は正しく行わなかったことが原因であると信じている。

4）多くの病気になった生徒が校長を好きではなかったことが，短期間では解決することができなかった一因であるかもしれない。なぜならば，これらの生徒たちは，校長にむかってひどい言葉で話したからである。

5）校長を替えたことがこれらの問題を引き起こした原因かもしれない。

1. 学校の中の争い（校長と他の教員の間）
2. 村人と校長の争い，からくる。

つまり，保健省では，今回の憑依騒動の原因を，もっぱら村人の迷信深さと，その迷信を信じない校長と村人，そして教師たちの間の確執にあるとみている。

13）M氏と話したあと大学生になっていたユアーを探しあてることができた。青白い顔をした細見の女性だった。ユアーは，大学の友人と共同で借りて住んでいた家での憑霊体験について話してくれた。

4）教員たちの解釈―原因不明

一方，教員たちは，こうした保健省や，またそれを同じ結論を出した教育委員会の見方を否定する。教員たちの集団憑依の解釈は，原因ははっきりわからず，また終息したのも何かが解決されたからというわけではなく，自然に止まったというものである。それは，3ヶ月にわたり憑依騒動に巻き込まれ，さまざまな試みを行ったあげく，ついに校長が転出した後にようやく学校が平静を取り戻した状況での教員たちの実感である。

ある女性教員は次のように語った。「精霊との交渉で解決した。N先生が，憑依した生徒と話し，精霊の要求をきき，精霊と交渉した。学校の雇い人が5人いて，生徒に憑依したとき（精霊から守るために）手首に紐を結んであげたら治った。話せばわかる。この校長はそれが理解できない。」また，土地神と交渉したという男性教員は，憑依騒動がおさまった後に「あのあと，音楽の練習をしているときに，木のところに（精霊が）みえたと生徒が言った。生徒には，もういないよと言わなければならない。もし（集団憑依について）話さなければ徐々に忘れていくだろう。」

教師たちの一致した見解としては，教育委員会の報告は，間違っているということである。校長と教員の間の確執が原因としているが，それは憑依がはじまって助けようとする教員側とそれを気に入らない校長の間で起こったことであり，原因として先に確執があったわけではない。憑依は自然におさまった。何が原因かは結論付けられないとする。

先に述べたように，A校長は2005年2月に憑依騒動の後T学校からM村小学校の校長に転任した。それは中学・高等学校の校長からの降格を意味する。M村小学校では，A校長はムスリムの村人の間で生徒に無理やり仏像を拝ませると噂になった。やがて校長と村人の一部が学校の資金をめぐり対立し，ついには校長のリコールを求める署名を集めて県の教育委員会に提出し，再び約1年後にA校長はM村小学校から転出することになった[14]。こうした，M村のその後の校長をめぐる事件からは，校長に不満があるならばリコールの署名を集めるという手段もあることがわかる。T学校の初代校長のいうように，かりに生徒たちが，親や村人の考えを内面化しているとしても，なぜ憑依した生徒本人が望んだわけではない身体反応として，こうした不満を表出することになったのかは依然として残る疑問であろう。その場で起こっている憑依という出来事そのものに目をむけることでしか，こうした疑問は解消されない。この点についての考察に入る前に，タイにおいて憑依現象がどのように扱われているのかを見ておきたい。

6　タイにおける他の集団憑依の事例

T学校の教員のインタビューによると，T学校では2004年の集団憑依以前にも，生徒の憑依は起こったことがある。しかし，そのときには，憑依したのは女生徒1人であり，精霊と話して理解しあったという。憑依しても，手首に紐をかけてあげると普通に勉強が続けることができた。

その他の学校では，2006年はじめに，プーケットで新しい校舎をたてるため土地神の祠を壊したために集団憑依が起こった。また，2006年8月には，サトゥーン県の北隣のトラン県の中学・高等学校で90周年創立記念式典1700人の生徒のうち30人ほど（うち男子生徒は2・3人）が憑依したという。トラン県の学校では1日だけの出来事で，仏教もしくはヒンドゥー教の司祭を呼んだ（2006年8月16日，N先生）。

14）今度はかなり小規模な小学校に異動となったが，やがてT学校の隣の中学校の校長として現在は戻ってきている。彼女の愛人が教育行政で力があるためであるともっぱらの噂である。

タイでは，このような集団憑依はこれまでにもしばしば見られた。これら事例は保健省の報告書にも「精神病の爆発的広がりの報告」として記されている（Samnakgan Satharanasuk 2005）。このような集団憑依は女性に多くみられるという。そのいくつかの事例を抜粋してみよう。

「1978年から1979年，ペチャブン県（中部タイ）K郡の学校　11歳から14歳の女子生徒12人が，精霊が憑依した症状で，失神し，倒れ，自分の手で自分の首を絞め，泣き喚き，痙攣した。教師たちは，精霊を追い払う儀式を行った。しかし，まだ女子生徒の失神は日々増加し続け，約2カ月間続いて止んだ。教師と村人の多くは，木の精霊が原因であると信じている。」

「1985年，スパンブリ県（中部タイ）U郡の学校では，雨安居（khao phansa）の儀礼のときに，12人の女生徒が失神，胸が苦しくなり，腹痛，手足のしびれ，筋肉の硬直という症状を示し，わけのわらないことを話した。これは，学校の屋根の上と学校の柱のタキアンの木（フタバガキ科 Dipterocarpaceae）の精霊が憑依して罰をくだしたのであると理解されている。しかし，人によっては，学校の前の祠の土地神が罰をくだしたのだともいう。なぜなら，生徒が敬意を払わないからだという。」

「1988年のトラン県K郡の工場で，25人の病人が発生した。（すべて女性労働者で平均年齢19歳）。みな似たような症状で，恐れ慄き，失神し，狂乱状態になった。その2・3日前に工場の変圧器の火事があり，『火事だ，電気が消える』という叫び声がした。労働者たちは気づいて大騒ぎしながら逃げた。翌朝も電気はついたり消えたりしていた。（工場では）精霊の話でもちきりになった。なぜなら，工場はかつて水死した人がいる川を跨いで建てられた。そこにはまだ骨がそのまま沈んでいるという。さらに，工場を建てるときに，頭蓋骨に柱を打ち込んでしまったのだという。死者はムスリムだったので，工場で病人が出て以来，イマーム（イスラームの指導者）を呼んで儀礼をしてもらっている。」

こうした事例は，学校以外にも，工場，監獄，病院などの閉鎖的なコミュニティで起こっているという。保健省が学校の精神医療に関する1982年から1986年の5年間に行ったアンケート結果によると，26保健所の報告から70の学校で，また15の教育事務所の報告では53の学校で発生している（Samnakgan Satharanasuk 2005）。

このように，T学校で起こった集団憑依は，必ずしもタイでは特殊な事例ではないということがわかる。当事者により原因とされることも，多くはT学校と同様，土地神や精霊などの超自然的存在である。そのような事態を外部の医療関係者は，閉鎖的なコミュニティにおいておこりうる精神的な疾患として取り扱っている。本論は，これらのどの原因が正しいのかといったことを明らかにすることを目的としない。そのような原因論は，現実を特定の視点から固定化させ，一定の像を描くことには役立つであろうが，そこでの齟齬や解釈の枠組みからはずれる事象は切り捨てられることになる。本論は，そこで現出してくる出来事を，潜在性が具現化する差異をもった重層的なプロセスとして捉える試みである。それが，はじめに述べた社会空間として憑依を記述することである。そうした記述により，何が見えてくるのであろうか。次章において検討する。

Ⅲ　憑依の社会空間
―ドゥルーズの「生成変化」による考察

本論で扱ってきた憑依は，訓練をつんだ呪医や司祭の憑依ではない。また，憑依しやすい性向をもった特殊な個人でもない。これまで一度も憑依した経験のない中学校や高校の生徒が大半である。学校という多くの若者が集団で長時間にわたり日常生活を営む場でおきた出来事である。マスコミでいう「憑霊す

る学校」において何がおこったのであろうか。はじめに，数人の生徒が憑依し，そうした現象が伝染する過程があった。そのような憑依は，学校という物理的空間に集中して起こった。学校は，抜け出せない憑依空間となり，さまざまな出来事が進行していった。

もう一度，憑依現象が生成されたプロセスをみてみよう。

1. 精霊の出現―生徒の失神・大騒ぎ
   村人の考えの流れ
   女性校長と生徒，教師の確執
   治療―呪医，保健所や病院からの医師団・調査委員会の来訪
2. スマトラ沖地震による中断―学校に村人避難
3. 異質な精霊の社会空間の出現―精霊同士の関係
4. 憑依現象の終息―女性校長の転出

こうした経過をみると，憑依現象はいくつかの段階を経て最終的に終息していると見ることができる。まず，生徒が精霊になることから憑依現象は始まった。そこから，憑依に関わって様々な人が，様々な思惑をもち行為している。そうするなかで，集団憑依という出来事が生み出されている。本節では，その場，その時の出来事のアクチュアリティを捉える方途を，ドゥルーズ哲学の中心概念の一つである「生成変化」の概念を参照して，次のようなテーマに絞って考察したい。1）精霊に〈なる〉こと―「進行中の生成変化」, 2）出来事としての憑依現象―情動の伝染。

1　生徒が精霊に〈なる〉ということ―「進行中の生成変化」

生徒が精霊に〈なる〉ことを，従来の憑依の人類学的な分析のように身体と主体の関係性に焦点化せず，出来事として分析するにあたって重要なのは，身体と情動である。

ここで，＜なる＞とは，ドゥルーズ／ガタリのいう「生成変化 devenir」のことをさすが，それは情動によって突き動かされる。ここでいう情動とは，スピノザが外的な諸物体が物体（身体）の中に作り出す「動揺の状態」を呼んだ概念であり（スピノザ 2007: 174），ひとつの個体が他の個体を触発し，また触発される力能のことをいう（デランダ 2008: 131）。情動が情動へと伝染して出来事を動かしていくが，それは身体がとりうる能力と密接に関連している。しかし，それは身体がそのまま生成変化して他の形態をとるといったことではない。

人間（例えばハンス坊や）が馬に＜なる＞生成変化のように，生成変化とは，みずからが保持する形態，みずからがそれであるところの主体，みずからが所有する機能をもとにして，そこから微粒子を抽出し，抽出した微粒子のあいだに運動と静止，速さと遅さの関係を確立することである，とドゥルーズ／ガタリはいう（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 314）。ドゥルーズ／ガタリのいう微粒子とは，自分がいま＜なろう＞としている身体それ自体のなかから抽出された「動物と人間を分かつ境界線がどこを通るか明言しえなくなる」（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 315）ゾーンでの生成変化の欲望のようなものとでもいおうか。これによってこそ生成変化が達成されるという。ここでは微粒子の近傍域あるいは同時現前のゾーンを見出すことが課題となる。生徒が精霊に〈なる〉生成変化は，人間と精霊を分ける境界が識別不能となることを示す。

精霊に〈なる〉生成変化を考察するには，ドゥルーズの吸血鬼や狼人間への人間の生成変化についての記述が参考になる。ドゥルーズは次のように書く。「そう，狼人間は存在する。吸血鬼は存在する。しかし，狼人間や吸血鬼に動物との相似や類似を求めてはならない。狼人間や吸血鬼は進行中の〈動物への生成変化〉」であるからである（ドゥルーズ ガタリ 1994: 317）。こうした意味で，生徒が精霊に〈なる〉のも，またこの「進行中の生成変化」であり，そこで起こっていることは，

身体から発した情動が，欲望のプロセスとしての近傍領域のゾーンを現前させていることである。

しかし，ここで憑依した生徒たちが，精霊になりたいという欲望をもっていたということを，通常の意識的な欲望という意味では理解しがいかもしれない。ここでは，生徒たちは，精霊になろうとして精霊になったわけではないであろう。しかし，校長に従順な存在たるべき生徒から脱して，別のものになろうとする欲望はあったといえる。ここでも欲望は，身体から発して，自らを生成変化させる力（＝情動）となるという意味で「欲望」をもつといいたい。精霊は，生徒の身体の力能のもつ情動により，潜在性を具現化させる生成変化の途上に出現しているとみることができる。生徒は，土地神や，水の精霊（phi nam），その他のさまざまな精霊に＜なる＞ことで，潜在性が現前化したアクチュアリティを示す。しかし，それは土地神や水の精霊を模倣することではなく，土地神や精霊を体現する憑依者は，憑依者自身と土地神や精霊が発する情動による生成変化を憑依した身体に具現化している。ここにおいて，人と精霊は新たな関係に入り，両者は互いに相手を変化させ，人間＝精霊の新たな共生関係が出現している。

2　出来事としての憑依現象―情動の伝染

従来の憑依の人類学的な分析のように身体と主体の関係性に焦点化せずに，出来事として分析することで何が明らかになるのであろうか。ドゥルーズは，出来事を次のように定義する。「出来事は，それがその原因に依存すると同時に，身体の混合および状態に依存しており，また，互いに浸透し合う身体，息吹き，そして質・資格によって，今ここで，生み出されている（ドゥルーズ／パルネ 1980: 100）」。ここで重要なのは，「今ここ」で生み出されているということである。ドゥルーズ／ガタリのあげる狼や馬になる子供の場合，「狼自体が，あるいは馬や子供が，主体であることをやめて＜事件＞となり，ある時刻，ある季節，ある雰囲気，ある空気，ある人生などから切り離せないさまざまなアレンジメント[15]に組み込まれていく」（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 302–303）という時の，「ある時刻，ある季節，ある雰囲気，ある空気，ある人生」の「今ここ」である。

出来事が生み出されるとは，生成変化がある方向に動くということである。箭内は，ドゥルーズの devenir「なること」・「生成」を，「生成，変化，変動とは，構成された形態ではなく，構成してゆく力とかかわるものである」として，過去＝現在＝未来の時間的連続性の内部で把握しようとする歴史と対比して，その特徴を「新しいものになろうとする（devenir）」動きを捉えようとするところにみている（箭内 2002: 215–218）。そこで重要なのは，「構成された形態」を乗り越えて，「新しいものになろうとする」さまざまな異質な「力」が同時に，しかし不揃いな形で作動している場所へとむかうことである。社会空間の記述は，すでに構成された形態を再構成することでもなく，どこかに潜在的にあるはずの原型を探索することでもなく，そうした作動しつつあ

15）アレンジメント（組合わせ agencement）は，ドゥルーズの基本的概念の一つである。パルネのインタビューに答えて，ドゥルーズは次のように説明する。組合わせとは，多種多様な要素が組み合わさった不均質な集合を，「共感」によって成り立たせている共生の状態をさす。ここでの「共感」とは，漠然とした親愛の情といった感情ではなく，身体と身体との努力または浸透，憎悪または愛だという。「共感とは，愛し合いあるいは憎しみ合う身体であり，それらの身体において，またはそれらの上で，その都度組み合わされる諸々の群なのだ。（ドゥルーズ／パルネ 1080: 83）」「組合わせの唯一の単位は共同＝作用であり，重要なのは，親子（上下）関係ではなく，結婚（同盟）関係との融合関係であり，遺伝，子孫ではなく，感染，疾病，風だ（ドゥルーズ／パルネ 1980: 106–107）」という。つまり，因果関係ではなく，偶然の結びつきの過程を焦点化しているといえよう。

る「力」が働いている生成変化の現場を「今ここ」から捉えることをめざす。

憑依現象においては，そうした力は端的に憑依する身体が他者の身体を触発し，触発されて，憑依が伝染していく情動の流れにみることができる。それは，受動と能動の境界を曖昧にしつつ進行する出来事である。憑依した生徒の一人，マサヤーの言葉は，そうした力を感受して身体の受動と能動が相転移するときの感触を表している。「憑依中のことは覚えていない。入る前の状態は，何かが横にいて，怖いと感じる。もうすぐ入りそうだと，こわい感じがする。そして何も感じなくなる。もう感じない。」そして，身体の動きが憑依する身体から身体へと感染し，出来事を展開していく。

学校での憑依現象は，憑依が憑依をよび，身体がとりうる能力として，能動的情動と受動的情動が，他の身体が示す情動と組み合わさりながら生成変容する身体やモノの社会空間である。生徒が，土地神，水の精霊（phi nam），その他のさまざまな精霊に〈なる〉ことで，校長-生徒関係は，校長-生徒＝精霊関係となり，新たな関係に入る。学校は勉強する場から，生徒＝精霊が学校の中を走り回り，祠を蹴倒し，池に飛び込み，それを教師たちが追いかけ，呪医が呪文を唱えたり儀礼を行うことで暴れる精霊と交渉し，おしとどめようとしている「憑霊する学校」という新たなアレンジメントが出現した。

憑依空間のアレンジメントのなかでもとりわけ，さまざまな治療の試みや，さまざまな精霊が入り乱れ，混乱をきわめている憑依空間において，事態が進行するにつれて劇中劇ともいえる精霊の躍動する異質な社会空間が創出されたことは，出来事の，偶然の，その場における情動が伝染し，別の出来事が生み出されていくことを示している。

まず，通常ならば絶対に発せられることのない，校長にむかっての乱暴な言葉や態度，普段の仲間関係とは異なる関係性，金切り声をあげての喧嘩，女子生徒がスカートを破ったまま下着をみせて走り回る性的無秩序の様相などが，異なる位相を保ったまま全体として集団憑依の社会空間が生成されていった。さらにここから，通常の友人関係を逆転させ，その空間における精霊間の新たな関係を浮き上がらせ，精霊のリーダーを頂点とする新たな秩序が出現した。しかし，それは全く新たな関係というわけではなく，ある意味で人間の関係をもとに，そこから精霊の関係という別の次元において人間の関係を滑稽化させたような精霊関係の出現であり，そこでみられたのは，学校における日常的な先生やさらには校長への権威に従順な生徒の関係性を参照しつつ，換骨奪胎した秩序である。しかし，ここでは憑依現象を非日常として日常に対立するものとしておくのではなく，これもまたアクチュアルな現実として出来事が展開していく偶然のその力に焦点をあてたい[16]。

また，逆に憑依の生成変化の中断も見られた。それは，学校での憑依が伝染するさなか，スマトラ沖地震による津波から避難するため，学校に村人が滞在したことによる憑依現象の一時的中断である。「ある時刻，ある季節，ある雰囲気，ある空気，ある人生などから切り離せないさまざまなアレンジメントに組み込まれていく（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 302-303）」というドゥルーズ／ガタリの言葉をもう一度思い出してみよう。ここでは，村人のその場への共在が，憑依現象という出来事のアレンジメントを変化させたとみることができる。そして，一週間後に学校から村人が退去したときに，憑依現象のアレン

16）ここでは，悲劇が常に，内在的な必然性が破滅的な終わりへと至らしめる「性格」であるのに対し，喜劇的な次元は偶発的なあり方に従属しているというジジェクの言葉が想起される（ジジェク 1994: 99）。

ジメントが再生されたのだ。

憑依現象は，精霊や憑依された身体が混合して，情動の力の作用により生み出された出来事であった。憑依という社会空間は，とりわけそうしたモノ・身体・こころと分断することなく差異を含んだまま進行している流れを記述することを誘発する出来事であろう。

Ⅳ　終わりに
―民族誌家の責任，情動のエスノグラフィにむけて

本論のはじめで，「エリクリチュールの目的とは，人生を非個人的な力強さの状態へ引き上げることである（ドゥルーズ／パルネ 1980: 78)」というドゥルーズの言葉を引用した。では，私＝民族誌家にとってエスノグラフィを書く目的は何であろうか。

ドゥルーズ／ガタリは，作家の責任として次のように書く。「ドイツロマン主義作家モーリッツは，死んでいく子牛に対して責任を感じるのではなく，子牛が死ぬ光景を前にして，その子牛が信じがたいほど明確な大自然の実感を伝えてくれるからこそ自分の責任を痛感する。つまり情動である（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 277)。」

そこから，民族誌家特有の責任について議論を展開してみよう。民族誌家の責任とは何か。自らが調査において体感した「あるもの」を，伝わるように書き込むことであると考える。「あるもの」とは，出来事の情動の流れであり，生の力そのものである。書くことはそうした情動を伝えることである。ここでの情動とは個人的な感情ではなく，一個の独立した性格でもなく，ドゥルーズ／ガタリのいう「群れの力能」を実現することにほかならない（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 278)。群れとは，互いに異質な複数の項からなり，伝染によって連動する複数の多様体が組み込まれた一定のアレンジメントをさす（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 280)。

本論にひきつけると，群れの力能の実現として憑依現象をみることは容易である。生徒や教師，教室，池，祠などの個体が他の個体に触発されつつ，学校が，あの場，あの雰囲気，あの季節に「憑霊する学校」へ生成変化したとみることができる。生成変化とは，潜在性の具現化であるとすると，潜在性の具現化した「憑霊した学校」のアレンジメントを，ある時に，ある場に共在し身体として感受した情動をエスノグラフィとして書くことで新たなものを生みだすことが，民族誌家のすべきことであると考える。

民族誌家のすべきことに関して，さらにもう一つドゥルーズ／ガタリが作家の仕事の主題としてあげる「例外的存在としての変則者との契約」[17] をヒントに考えてみよう。変則は，一個の多様性との関係における一つの位置や，位置の総体であるという。「魔術師（作家）は，群れにおける例外的個体の位置を定めるために，「変則」という古い形容詞を用いるのだ。動物に＜なる＞ためには，モービィ・ディックやヨゼフィーネのような＜変則者＞と同盟するしかない」（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 282)。個体でも，種でもないこの変則者とは何か。それは，一個の現象であるという。ただしそれはボーダーの現象であるということを忘れてはならないという（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 283)。このことは民族誌家の問題と直接に繋がっている。

民族誌家は自分自身に直接に響くボーダーを感知し，それを書き込む。自分自身のボーダーとは，自分にとって当たり前のことからはずれる，理解しようとしてしがたい，自らの経験の仕方に変更をせまられるぎりぎりの経験である。憑依現象の記述においては，私にとってのボーダーは憑依した生徒の身体であり，そこで生成される憑依空間そのもので

17）ドゥルーズは「群れとしての動物による伝染」と「例外的存在としての変則者との契約」の二つ主題をあげ，当初は矛盾を含んだものとみられたものが溶解していくと説明する（ドゥルーズ ガタリ 1994: 285)。

ある。そのエスノグラフィを書くことは，タイにおける集団憑依現象が特殊な事例ではないこと，日本におけるみずからの経験においては特異であること，しかし，タイにおいて憑依した生徒，例えば聡明なマサヤーの憑依状態の語りや，憑依をみていた生徒や教師の語り，池と祠を擁した学校のたたずまいなど，そこにおいて憑依現象がおきた出来事のアクチュアリティを，ありありと自らのうちに取り込むことである。書くことそのものもが，ドゥルーズのいう微粒子の近傍域あるいは同時現前のゾーン＝ボーダーを示すことになる（ドゥルーズ／ガタリ 1994: 314）。そして，こうしたボーダーにおいて，民族誌家も幾分か変容している。

民族誌家のあの場，あの時の共在は偶然の受容であり（たとえ，今回私が行ったように，憑依の出来事を事後に関係者のインタビューや現場の訪問などでそれを感受したとしても），それを書き込むことは偶然をみずからの中にとりこみ，必然とする過程でもある。そして，私にとって民族誌家の責任とは，受容したものを，エスノグラフィに書き込むことで必然として感受することである。その変容過程における記述は，「新しいものになろうとする」民族誌家自身の生成変化の痕跡である。本論の憑依の社会空間の記述は，私が感受した出来事を記述することで，私＝主体を超えた受動と能動が交差する存在のあり方に焦点化しようとした。本論は，情動のエスノグラフィにむけての第一歩となる。

参　考　文　献

安部年晴・小田　亮・近藤栄俊編　2007 『呪術化するモダニティ―現代アフリカの宗教的実践から―』風響社。

石井美保　2007 『精霊たちのフロンティア　ガーナ南部の開拓移民社会における『超常現象〉の民族誌』世界思想社。

石塚尊俊　1959 『日本の憑きもの』未来社。

エリアーデ，ミルチャ　2004（1951）『シャーマニズム―古代的エクスタシー技術』ちくま学芸文庫。

湖中真哉　2011 「身体と環境のインターフェースとしての家畜：ケニア中北部サンブルの認識世界」床呂郁哉・河合香吏（編）『「もの」の人類学』，京都大学学術出版会：pp. 321–341.

小松和彦　1982 『憑霊信仰論』伝統と現代社（増補版：講談社学術文庫　1994）。

佐々木宏幹　1983 『憑霊とシャーマン―宗教人類学ノート』東京大学出版会。

――――　1984 『シャーマニズムの人類学』弘文堂。

スピノザ　2007 『エティカ』中央公論新社。

ジジェク，スラヴォイ　1994 『ヒッチコックによるラカン』トレヴィル。

高木光太郎　2002 「想起の発達史―自白の信用性評価のために」田辺繁治・松田素ニ（編）『日常的実践のエスノグラフィ　語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社：40–60.

竹沢尚一郎　2007 『人類学的思考の歴史』世界思想社。

田中雅一　2006 「ミクロ人類学の課題」田中雅一（編）『ミクロ人類学の実践　エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社：1–37.

田辺繁治　1998 「儀礼的暴力とその身体的基礎―北タイの供犠と憑依について」田中雅一（編）『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会：107–138.

――――　2004 「夢と憑依―宗教的体験から日常世界へ」『言語と身体　聖なるものの場と媒体』岩波講座　宗教 5，岩波書店：211–242.

デランダ，マヌエル　2008 「ドゥルーズの存在論　ひとつのスケッチ」『現代思想』vol. 36-15: 126–149.

ドゥルーズ，ジル　2007 『差異と反復（上）』河出書房新社。

ドゥルーズ，ジル／パルネ，クレール　1980 『ドゥルーズの思想』大修館書店。

ドゥルーズ，ジル／ガタリ，フェリックス　1994 『千のプラトー　資本主義と分裂症』河出書房新社。

床呂郁哉　2002 「語る身体，分裂する主体―スールーにおけるシャーマニズムの言語行為論」田辺繁治・松田素ニ（編）『日常的実践のエスノグラフィ　語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社：87–116.

西井涼子　2006 「社会空間の人類学―マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治（編）『社会空間の人類学―マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社：1–29.

――――　2011a 「時間の人類学―社会空間論の展開」西井涼子（編）『時間の人類学―情動・自然・社会空間』世界思想社：1–36.

――――　2011b 「死をめぐる時間―情動（アフェクトゥス）のエ

スノグラフィーにむけて」西井涼子（編）『時間の人類学―情動・自然・社会空間』世界思想社：62–87.
浜本 満 2007「妖術と近代―三つの陥穽と新たな展望」『呪術化するモダニティ―現代アフリカの宗教的実践から―』風響社：113–150.
林 勲男 2006「意識の変容，多次元的な自己―ベダムニにおける夢と交霊をめぐって」田中雅一（編）『ミクロ人類学の実践 エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社：351–378.
真島一郎 1997「憑依と楽屋―情報論による演劇モデル批判―」『儀礼とパフォーマンス』岩波講座文化人類学第9巻：107–147.
宮坂敬造 1997「言説と実践のはざまにあらわれる身体をめぐって―ジェンダー，ダンス，身体化にかかわる儀礼の考察から―」『儀礼とパフォーマンス』岩波講座文化人類学第9巻：267–314.
宮崎恒二 2005「時空間のあいだの翻訳―ジャワ系マレー人の呪力」真島一郎（編）『だれが世界を翻訳するのか アジア・アフリカの未来から』人文書院：225–239.
箭内 匡 2002「アイデンティティの識別不能地帯で現代マプーチェにおける「生成」の民族誌」田辺繁治・松田素二（編）『日常的実践のエスノグラフィ』世界思想社：214–234.
吉田禎吾 1972『日本の憑きもの―社会人類学的考察』中公新書。
ラトゥール 2008『虚構の「近代」―科学人類学は警告する』新評論。
ルイス, ヨアン・M 1985（1971）『エクスタシーの人類学 憑依とシャーマニズム』法政大学出版局。
Ackerman & Lee. 1981. Communication and cognitive pluralism in a spirit possession event in Malaysia, *American Ethnologist* 8: 4, pp. 789–799.
Boddy, Janice. 1989. *Wombs and Alien Spirits: Women, Men and the Zar Cult in Northen Sudan*. Madison: The University of Wisconsin Press.
——— 1994. Spirit Possession Revisited: Beyond Instrumentality, *Annual Review of Anthropology* 23: 407–434.
Comaroff, Jean and Comaroff, John L. 1999. Occult Economies and the Violence of Abstraction: Notes from the South African Postcolony. *American Ethnologist* 26(2): 279–303.
——— 2001. Millennial Capitalism: First Thoughts on a Second Coming. In *Millennial Capitalism an the Culture of Neoliberalism*. J. Comaroff and J. Comaroff (eds.), pp. 1–56. Durham; London: Duke University Press.
Gell, Alfred. 1992. *The Anthropology of Time: Cultural Construction of Temporal Maps and Images*. Oxford: Berg.
Golomb, Louis. 1978. *Borders of Morality: Thai Ethnic Adaptation in a Rural Malaysian Setting*. Hawaii: The University Press of Hawaii.
Lambek, Michael. 1996. Possession. In Alan Barnard and Jonathan Spencer (eds.), Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology. London & New York: Routledge.
Morris, Rosalind. 2000. *In the Place of Origins: Modernity and its Mediums in Northern Thailand*. Durham: Duke University Press.
Ong, Aihwa. 1987. *Spirit of Resistance and Capitalist Discipline: Factory women in Malaysia*. Albany: State University of New York Press.
Samnakgan Satharanasuk Cangwat Satun（サトゥーン県保健省事務局）2005. Raigan kanwicai rwang kan rabat khorng rok thang cit:kan pen lom na mwt nai nakrian mathayomswksa) (The outbreak of Psychogenic illness: Syncope, Faintness in Secondary school)

原稿受領日―**2012** 年 **4** 月 **27** 日